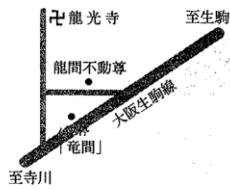
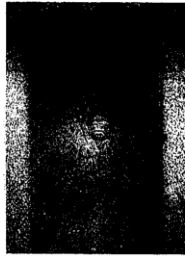


今昔物語 第27話

龍間不動尊の役行者像

7~8世紀(奈良時代)の大和葛城山呪術者の役小角の像です。大陸系の呪術師である韓国連(高麗)も彼に師事したと言われますが、世を恐ろす妖言を吐いたとの理由で、役小角は伊豆に遠流されました。実在者としての役小角は、山岳信仰を盾にしたシャーマン風なものでしたが、後世、密教が山岳信仰界に浸潤してくると、彼を理想的祖師と仰ぐ傾向が強まっていきました。その呪験力の優れていたことをたたえ、伊豆を中心に各地の山の頂から頂へと飛び駆ける、たくましい一本足駄履きの姿を理想像に描くようになりました。

更に大峰山から熊野山にかけて彼らの中心的な道場が開かれて、役行者はこれらの山々と関係を持つた人物であるかのように伝説化しました。更に、各地の霊山には、どこでも役行者開祖を伝える話が出来てきました。また、役行者は山伏の開祖とされ、修験道界第一の大先達と仰がれています。



塞(塞)の神(さえのかみ・さへのかみ)とも呼ばれています。古くは「日本書記」の中に来名戸之祖神と書かれており、地方によっては、岐神・祖神・道陸神とも書かれています。道祖神は、猿田彦神「土地の生霊・スピリット」というべき神「先導役の神」と後世説明されるようになり、その後、陰陽道や仏教などの信仰と習合して、種々の雑説が伝えられてきました。元来は災いを防ぐ・防塞の神であり、外から襲来する疫神や悪霊を村境・峠・岐路・橋畔などで守り防ぐと信じられてきました。また旅行の神とも生死二界の境をつかさどる神とも考えられてきました。



龍間塞の神・陽石

よく知られているものに京都五條道祖神・出雲路幸神があり、全国に著名な道祖神がありました。地域によってさまざまですが、地藏・男女二神、あるいは神霊のある丸い石などを神として村の辻などに祀り崇拝した庶民の信仰の一つです。東日本には夫婦和合像が多いですが、西日本ではほとんど見掛けられません。市内では、北条・教照寺内と中垣内・鳳字寺前と龍間・龍光寺跡前に存在しますが、特に龍間の塞の神に祀られている陽石(男根石)は、この辺りでは珍しく一見の価値があると思われれます。

今昔物語 第28話

道祖神(龍間)